

ドイツの射撃団の評価

— 過去と現在 —

Sven HOLST

1. 序

現代のドイツ人の社会生活には祭りや協会が欠かせない。商工会や自治体が消費促進のために新たに開催し始めた行事から、長い伝統を持った宗教的な行事まで、祭りの内容は幅広く、多くが真夏を避けて行われている。自治体・商工会と教会という両極の間の多くの祭りの担い手は協会である。協会とは、法律的な基準を充たしたうえで裁判所に登録した非営利の法人であり、環境問題対策から教育やスポーツや文化まで幅広い活動の核となっている。

ドイツの西部と北部の典型的な祭りは射撃祭である。自治体の最大の祭りであり、田舎の小さな自治体では、これが唯一の祭りであることも少なくない。その射撃祭の担い手は射撃協会である。射撃と銃の所持に批判的な戦後のドイツ世論¹のなかで、射撃協会は活動を続けている。そして主催する祭りを通して自分の存在を示している。伝統があり、社会生活のために重要でありながらも、世論の批判を浴びている集団が、どのように自己評価しているかを、この報告では観察する。仕草や行動、衣装、作り物（建物・記念碑）を通して、それを調査することもできるわけだが、ここでは射撃協会が発行した書物（そしてまた最近のホームページ）を中心に調査する。種々の事情や考え方がこのような文章から読み取れるからである。

射撃団（Schützengruppen）²は12—13世紀頃から、フランダース地方のいくつもの繁栄した自由都市で、防衛集団として生まれてきた。それは教会配下の信心会（Bruderschaft）の形をとり、広くドイツと現在のポーランドま

で広がった。ドイツには12-13世紀に設立された射撃団が未だに存在している。当初は弩を操り、15世紀からは徐々に鉄砲に移っていった。17世紀には領主側の働きかけによって民兵として召集されたりもしたが、18世紀半ば頃にはその軍事的な意味がなくなり、領主や教会からの賞品・賞金を共通の財産で補う親睦会・遊びの会となった。信心会として会費、罰金、遺産から集めた財産（土地・建物・教会の特別な祭壇）を保有し、教会の行事や信心会の行事、会員の葬儀などを営んだ。年に1回の射撃祭り（Schützenfest）を開いて、射撃競争で射撃王（射撃競技の優勝者：Schützenkönig）を決め、ビールと食事、音楽で楽しい集会を開いていた。君主や自治体が様々な賞品を提供して、射撃王が1年間納税を免除された例もある。

近世の社会体制は19世紀初頭に崩壊した。射撃団と同じく信心会の形を取ったギルドなどが解体されていった。しかし射撃団は古い伝統を誇りながら、生き延びた。信心会（Bruderschaft）という形からクラブ・協会（Verein）に変身したことが、その延命の要因である。プロイセン領土になったウェストファーレンでは、射撃祭を開催する緩やかな結合体を形成し、カトリック系の射撃信心会³の活動を抑圧して、より明確な責任体制を作るために、代わりに協会法人（eingetragener Verein）の創立を促進した。19世紀半ばから後半にかけての時期と、1920年代、1950年代が、新しい射撃団の創立のピークであった⁴。これらは産業革命期の第1の都市化の波、第1次世界大戦後の不安な時期、そして第2次世界大戦後の混乱と社会再編の時期に当たっている⁵。

各射撃団の歴史は、その地域と町の歴史や領主との関係、宗教関係などに影響されて、それぞれが異なる発展を示している。古い時代の場合は、史料の有無によって、見解も違ってくる。この報告では、ある特定の射撃団の発展や、過去と現在の射撃団の組織の変化についてはとくに上げない。むしろ上に述べた3つの新たな創立の波の前後の、いくつかの射撃団の社会的評価を質的に比較検討してみたい。そしてとりわけ射撃団の自己評価・存在意義を中心に調査してみたいと思うのである。

2つの大戦と、急激な経済と社会の変化にともない、射撃団の自己評価・存在意義・目的は大きく変わったはずである。150年前ならば、射撃団の軍事的な意味、国力の強化、競争主義の強調といった要素が容易に想像できる。しかし2つの大戦を経た現在の射撃団は、むしろ社会的な交流やコミュニティーづくり、スポーツや国際交流を活動の目標として挙げている。

この歴史の大きな変貌の過程に、射撃団のいくつかの転機を想定することができる。1つ目の転換期は1803年—1813年である。古い体制の崩壊と、民兵を擁した解放戦争により、射撃団は名士の遊び場から国土の解放力へ大きく変わった。転機の2つ目は、市民によって民主主義的なドイツ統一の試みがなされた、1848年のドイツ3月革命である。このとき射撃団は暴動に参加したり、逆に暴動を抑えにでたりしたのである。

3つ目の転機となるのは、1861年にゴータ市で行なわれたドイツで最初の共同射撃祭である。後援者であったエルンスト2世ザクセン・コーブルク・ゴータ公爵は、ドイツの統一と防衛と名誉の維持を呼びかけていた。この射撃祭の後で、射撃団の代表者たちが会合して、ドイツ射撃連盟を立ち上げた。そして1866年から1871年にかけての君主主導の軍事的なドイツ統一運動で、射撃団は国民の軍事教育の役割も果たしたのである。さらに普仏戦争のあとに設立された軍人会（Kriegerverein）もまた、場合によっては射撃会に発展した。そして4つ目の転換期は、1914年から1918年までの第1次世界大戦である。国民兵の敗北と君主制の崩壊の後、市民は射撃団のもとに再び結束して、国の強化に努めたのである。5つ目の転換期は1933年から1945年までのナチス時代である。射撃団では1935年に統一の協会規定が決められ、協会レベルでの総統体制（Führerprinzip）が導入された。体育帝国連合に加入しないカトリック教会系の射撃団は禁圧された。教会との関係の深い射撃信心会は、その絆を断ち切るか射撃をやめるかの決断を迫られた。1938年からは体育帝国連合とそれに加入したドイツ射撃連盟が、ナチ党の組織に組み込まれて、ドイツ射撃連盟という名称も消滅した。5つ目の転換期は敗戦後である。射撃協会はナチ党所属組織として禁止され、軍事教育、軍国主義・再軍備などを防止するために、射撃祭自体も開催できなかった。その後、驚の的を投げ落とししたり、弩を復活させたり、100年以上も前の教会配下の信心会の形に戻ったりした。50年代からは明確な軍事的位置づけがなくなり、スポーツと団欒の場として再確認された。

本稿では以上の転機を考慮に入れて、それぞれの時期の射撃団の内外の評価を、諸資料により考証する。いうまでもなく射撃団外の関係資料が社会から見た射撃団を示し、射撃団内の資料が射撃団の自己認識を示す。

資料は古本屋やインターネットで閲覧できる古書、各協会のホームページ、そしてそのホームページから閲覧できる Pdf ファイルの射撃祭の際の雑誌を

利用した。どの種類のものでも採否の偶然性は否定できない。各射撃協会が必ずホームページを持っているわけではなく⁶、たとえホームページが存在していても、その協会の歴史などに詳しく触れるものはさほど多くはない。存在意義の評価の変化を調べるのが目的であるので、特に長い伝統を誇る射撃団関連の記事を選ぶこととした。ホームページは流動的であり、団体を代表する意見であるかどうか疑わしい場合もある⁷。ゆえに公刊された雑誌や書物または Pdf のほうが資料としてはより好ましい。

いくつかの射撃団が、何百周年などと銘打って記念誌を刊行したり、またインターネットのホームページで自己宣伝したりしている。現在の射撃団についての資料は多いが、19世紀前期から半ばの資料は少ない。しかし射撃団に近い立場から書かれたものでもあり、射撃団に批判的な記述からも射撃団に対する世論が分かる。このような資料を通して社会の中での射撃団の位置づけを調べることができる⁸。

記念祭や射撃祭の際に出された書物のほとんどはソフトカバーで、50～100ページの分量である。ページの半数は広告であり、そのほかに自治体代表（郡長、市長等）、地区の神父、射撃協会連合会長当該の射撃協会長の挨拶、射撃祭のスケジュール、協会の歴史（協会設立以前の歴史、設立、協会の歴代射撃王）が載っている。射撃祭や記念祭のときに発行したパンフレットは単に会員向けの書物ではなく、来客（他所からの射撃人・射撃団員以外）に向けての射撃協会の自己宣伝でもある。ただしこのような書物のなかには射撃協会の実態は必ずしも反映されておらず、むしろ美化した自画像と存在意義を読み取ることができる。そしてそこには協会への反対意見や協会内の亀裂がほとんど現れていない。以上の点を考慮に入れながら、質的な言説分析を行っていきたい。そしてそのための資料の収集と日本語での紹介に努めたい。なお、考察に関連して強調したい部分には、資料の本文にアンダーラインを施してある。

2. 近世の射撃祭をめぐる啓蒙期の諸言説

近世初期には君主などが射撃祭を奨励していた。しかし近世末期のドイツ啓蒙期には射撃団が置かれる状況が変わった。まずはその模様を伝える資料を取り上げてみよう。

資料1：「この（射撃の）信心会は昔全ての身分からの最も名望な人々が会員であったが、今は減少している。」（『シュレジア史』1789年より）⁹

資料2：「...田舎で行う射的は有害である。農民の福祉にとって他のより相応しい祭りがおこなわれたらいいと思う。〔中略〕君主とその顧問のお知恵のおかげで5千人の常備軍が設立された。これは住民の負担なしに訓練されている。兵役を務める若者にはそこで正しい武器の使い方と戦い方が教えられた。〔中略〕田舎の射撃団はそこに必ず起こる混乱のために有害である。焼酎の勢いで気の大きくなったふらつき農民が、混乱と放蕩で多くの不幸を招いている。不慣れの手に武器を取ったら、騒ぎの仲間をたとえ殺さなくても、身体上の被害を与えるような不幸がより起こりやすくなる。田舎の射撃祭の宴会の際によく起こる不道德なことまでは触れないでおく。...」（1776年、『ハノーファー雑誌』より）¹⁰

資料3：「射撃団が今とは完全に違う時代、市民が市を敵の攻撃から守らなければならない時代に誕生したことに注意してもらいたい。賞品で鉄砲の稽古に励んでいたのである。この目的がなくなった後には、射撃はただの市民の遊びとなった。それが毎年、市の会計の重い負担となった。射撃団が自分の権利の保持を求めなかったら、廃止あるいは削減しようと考えたが、逆に射撃団は自分の権利の拡大に努めた。」（『エルビング市史』1818年より）¹¹

資料3の舞台となるエルビング市にとっては、射撃祭が大きな負担であった。1768年に射撃団は市当局に対して土地の利用権について裁判を起こし、それ以後しばらく射撃祭は行われなかったが、1772年にエルビング市はプロイセンの領土となった。射撃団は西プロイセンの軍事・御料地局に射撃団の再興を訴えた。軍事・御料地局はその訴えに好意を持たなかったが¹²、ともかくも市当局からの報告を求めた。資料3の報告書のなかで、市当局は射手の重い負担を指摘して、市民がその祭りのために自分の家業をほったらかしにしたのだと否定的な評価を下している。ちなみにベルリンの射撃祭は1727年から1747年まで禁止された¹³。ダルムシュタット市では1775年の事故のために射撃祭と行列が1784年まで禁止され、1787年にも理由を知らされずに再び禁止された¹⁴。近世末期には射撃団は無駄遣いと見られ、事故を起こしたり不

埒を犯したりする悪習と見なされた。

それでも昔どおりに君主側や市の名士たちが関わる射撃団も依然としてあったので、資料3と同様の批判が、プロイセンの首都ベルリンで発刊された誌面の上で、啓蒙主義的な立場から行われた。以下の資料4は、この批判に対するベルリン射撃団団員からの反論がある。

資料4：「〔射撃祭は〕楽しみであり、公の娯楽であるので、すべての愛国者と国家がそれを尊重しないとイケない。勤勉な市民、徳の高い娘、忠実な家僕に報いることがいいのだとユニウス氏の著書の543ページに書かれていた。しかし一日中働いた人が楽しんではいけないというのは、本当におかしい。〔中略〕一日中働いている人が楽しむことが許されないというのは、おかしなことである。〔中略〕晴れやかな気持ちを持っている人のほうが、心地よく社会福祉のために自分の財産を分け与え、より早くに仕事につき、彼が分け与えるものを稼いでいる。楽しみとしての射撃や関連の遊びのほうが、ロンベル会合や喜劇でじっと座っているよりもいい。射撃は、人を男性らしく元気にするし、神経の病や下半身の痰の詰まり〔性機能障害〕やヒポコンデリーに効く。〔中略〕市民が1ヵ所に集まって楽しんだら、彼らはこの楽しみがある自分の町や国のことを、1年中快く思うようになる。一緒に楽しんだほかの市民にも好意的になる。金持ちや気高い人々にしても、それを避けずに、皆が集まったほうがいい。なぜならば、私たちは皆平等である。神の子としてだけではなく、国家の僕と臣民としても平等なのである。〔中略〕妻や娘たちが驚きで悲鳴をあげ、息子たちがいつか自分も鉄砲を撃てるようになるのを待ちかねるように、ドンと音を立てたいのだ。」(以上1785年の『ベルリン月報』より)⁴⁵

最後の一文は、射撃で男性らしさを誇示しようという趣旨だろう。この団員は直接的には、同誌前月号掲載の射撃団への批判記事に反論している。その批判記事によれば、射撃祭では事故が起こるし、財政的な問題や健康の被害もある。そもそも無駄な浪費を社会福祉のために使ったほうがいい。射撃は官能的な欲望を促進するし、一般市民には武器を持たせないほうがよく、慣れない市民の射撃は下手で可笑しい。この趣旨の批判に対して、団員の反論はこうである。まずは射撃祭のときの事故は少なく、事故の防止を努める必要はあるが、祭りの禁止は不要である。ほかの娯楽・体育も危険であるが、すべて

を禁止すると国民が塞ぎ込んで不健康になる。官能的な欲望をとくに射撃祭が促進するということはない。その気持ちがありさえすれば、その問題はどの機会でも現れる。上手と下手は関係なく、下手で楽しむ権利もある。市民は害鳥、狂犬、泥棒に対する自己防衛のために銃を使えなければならない。プロイセンの軍隊の半分は市民・農民なので、銃を使わなければならない。このように色々と述べてはいるが、最も重要な論点は、「楽しみ」である。

3. 19世紀の射撃協会

1803年の聖界諸侯領の世俗化と帝国都市・貴族領地の再編に直面して、自治体にとっては射撃祭の活動が無益な負担であったので、祭は制限されたり、支援が削減したりした。ただし射撃団と自治体名士・有力者などが密接な関係を保っていた自治体の場合には、このような問題がすくなかった。19世紀初頭での近世体制崩壊とともに、射撃信心会・射撃ギルドも解体の道を進んでゆく。それから以後、協会法人としての再興までは、法的・社会的な基盤が整うまでに、かなりの時間が必要であった。

1817年2月15日、プロイセン王国アルンスベルク県庁からの御触れのなかでは「規則正しく行ったら損害が生じないような、良好な射撃と鳥射撃の練習を事前に行ってから再興されることが望ましい。そのためにはその町・地区・地方に相応しい記念すべき日を選んだほうがいい。」¹⁶とされている。プロイセン政府が積極的に射撃団の再興を勧めたのである。その背景としては、プロイセンのフリードリヒ・ウィルヘルム4世のロマン主義（中世復興）もあった。そしてまた解放戦争で頑張った民衆に対して以前よりも寛大な気持ちをもったのである。この両面が以下の資料5から読み取れる。

資料5：「木製の鳥を射落したり、軍人遊びしたりすることは、まじめな男性に相応しいかと聞かれた。そう尋ねられたのは、武器の扱いの練習という昔の目的がほとんどなくなったからである。そしてまた一般市民の家庭に悪影響のある遊びと出費を招くことが問題ではないかと考えられたからである。しかしこれに対してはこう答えることができる。多くの人間にとっては、自分の身の上や悩み、日常の雑事を完全に忘れることが必要である。射撃団の中では社会的に高い身分と低い身分の人々が親しく接触する。それによって互いの信頼と親近感が高まる。この祭

りによって、たくさんのお金が動いている。民衆の祭りが民衆（の感情）を静める。君主たちと政府は祭りに際して、国民に対する好意と慈悲を示す機会が得られる。全体的に見て、祭りを妨げるよりも奨励したほうがいい。ドイツの鳥射撃がイタリア人のカーニバルや、スペイン人の闘牛、イギリスの集会と闘鶏、騎士の競技に劣っているわけではない。」（1855年、ある経済・工科百科事典の関連記事より）¹⁷

資料6：「協会の目的 第1条 危険なときに王様と祖国を国内外の敵に対して積極的に守るために、以下にサインするブリュケナウ市の市民が射撃ギルドに団結する。ギルドは郡の警察署の依頼に従い、法的秩序を保つために積極的に手伝うことを約束する。その代わりに警察署によって、ギルドの社会的な権利が維持されることを望んでいる。」（ブリュケナウ市の1848年の射撃団規約より）¹⁸

射撃祭再興の条件は、王室への忠誠であった。資料6が会員の本心をどの程度まで反映しているかは定かでないが、公の権威が附いたことで、会員の自慢と自負が潤っていたと想像することはできる。

1848年の3月革命の際には、射撃団を民兵に改変する呼びかけがあり¹⁹、ベルリンなどでは積極的に暴動に参加した記述がある²⁰。しかし地方では暴動を抑える活動も報告されている²¹。さらには射撃団を廃止して、予備軍として軍隊の配下に置くような議論もあった²²。

1861年にドイツ射撃連盟の設立が宣言され、1862年にフランクフルトで第1回の連盟射撃祭が開催された。そのときの参加者の意識を以下の資料から推察することができる。

資料7：「大きな国民的組織への統一の努力が、この世紀にヨーロッパに現われた。特に我が祖国では数年前からドイツの射手たちも動いた。ドイツ語圏の様々な国で射手たちが射撃団や射撃協会に集結し、地区や郡、地方の連合をつくった。...この統合への努力と兄弟的關係を作る過程で、ドイツ人青年男子の戦闘能力を促進する希望も湧いてきた。また、危機に曝されたドイツの祖国に軍隊以外の防衛組織を作る希望が現れた。〔中略〕実行委員会は呼びかける。...射手よ、来たれ。我が祖国の統一と自由、権力と偉大さの象徴である黒・赤・金の旗の下に兄弟の契りを結べ、と。」（「ドイツ射撃と防衛新聞」6号1861年の記事より）²³

1862年に集まった射手たちは、黒・赤・金色の旗を掲げ、民主主義的なドイ

ツ統一を望み²⁴、武装蜂起を断念した。法に従って、教養をとおして、民主的な統一を成し遂げたいという意見もあった²⁵。

しかしそののちに、君主側（プロイセン）によるドイツ統一が軍事的に実現したのである。民衆はその勝利を賞賛して、民主主義を欠いた軍事強国への道に納得した。軍事的強化論の視点からは、射撃団の墮落が指摘された。次の資料8に見えるように、20世紀初頭の一般的かつ代表的な大百科事典でもそのような評価が行なわれている。

資料8：「しかしそれ以後は他の遊び（サイコロゲームや見世物小屋）を祭広場に設置することが増えた、ほとんど1週間かかる射撃祭で男性の射撃は、関心の中心から消えてしまった。19世紀半ばに国家思想の促進のために体操愛好者たちが団結したときに、射手たちの間にも同じ考えが芽生え、スイスの射撃大会を真似て、1861年にゴータ市で総合射撃と体操の祭が開催された。そこで総合ドイツ射撃連盟が提案され決議されて、それ以後はこの連盟が連盟射撃会を開催した（1872年から3年ごと）。地方で毎年開かれている射撃祭はそれとは関係がなく、この祭りは大衆の楽しみである。本当に射撃が最も上手な人でも、負担が多いために祭りの王座に就かないので、射撃の練習が減退した。」（1905年、代表的な百科事典より）²⁶

この百科事典の記述によれば、射撃祭は軍事教育に役立たない、ただの娯楽である。しかし、射撃団会員の意識は違っていた。

資料9：「鳥を撃つのは娯楽につながったが、その主な目的は市民の防衛力を高めることであった。復讐のための戦いが多かった時代には、いざというときに勇気をもって領主を助けるのに役立った。小さな君主は必ずしも軍隊を備えていなかったため、非常事態には市民が自分で家と家族を守らなければならなかった。その防衛力の促進のために射撃の練習とそれに関連する規律と服従がとても適していた。一体感と協同意識を、市民の徳として養わなければならない。100、200、300年前を想像してみよう。私たちには徳高い市民が見える。彼らは射撃広場に出動して、そこでも市民の義務を果たしている。その後で、名誉ある徳高い主婦とともに飲みかわして、さわやかな気分となったのである。」（1889年、射撃団300周年の際の演説より）²⁷

これはかつて民衆が君主たちを助けたことを指摘する供述である。長い伝統

の中にたしかな実績があると強調しているのである。

資料10：「...1879年に“総合射撃会メンツェルナー・ハイデ”の協会を設立し、活発な協会活動をとおして、社交を促進し、愛国心を奨励するために、まずは射撃祭の実施を目指す。」(1929年、50周年記念雑誌より)²⁸
ここでは当時の射撃団の目的は、愛国心を育てることとされている。しかしそれは射撃祭の開催のための口実に過ぎないのだと批判することもできる。

資料11：「世紀末あたりに協会の活動が激減した。ほかにたくさん、より具体的な目的を持つ協会が現れて、身分と職業による分離が進んだ。〔中略〕ジークブルクの射撃協会は千年の確かな実績がある“スポーツ”を怠らない。これをスポーツらしくなく、わざとらしくなく芸術と訓練として続くようにするためである。ジークブルクの射撃協会は、故郷と祖国の目的のために熱心な、健康的で善良な世代を育てることに協力する。〔中略〕全ての会員がはっきりした目的を持ち、訓練された明晰な目で、的確な仕事をして人生を営み、その目的を外れないようにするために。」(ジークブルク市の射撃団の1914年の400周年記念雑誌より)²⁹

この1914年の資料では、スポーツとしての射撃の意識が、レジャー意識の到来を告げている。そしてレジャーとしての射撃は、ほかの協会と市民を奪い合っていたのである。これは市民の統合を目指した協会としての敗北である。しかし射撃は単なるスポーツではなく、人格形成の役割がある、という主張が読み取れる。射撃に対して「スポーツ」という単語を使っているが、引用符でその単語に対する違和感を表現したのであろう。最後の部分にも標的を外さぬといった射撃の比喻が多いけれども、その前には伝統的な活動らしくするほうが望ましいと書いているので、ただの腕と目の競い合いだけではなく、伝統的な活動の維持そのものも重要であるとの著者の意図が分る。愛国心を持つ元気な若者の教育を射撃団の存在意義に掲げたのである。

4. 第1次世界大戦後

この時期については、当時刊行の1次的資料が発見できなかった。それゆえここでは2次的な資料、つまり第2次世界大戦後の文献中に見られる当時の記事を利用しなければならない。時事的な立場から書かれた記事であるので、僅かに触れただけだったり、無視された内容もあったりするものと推定

できる。その点を意識して、資料を読まないといけな

以下の資料の記事は全体としては、ワイマール時代のルール占領による活動停止と1923年のハイパーインフレによる苦難に触れている。資料12として紹介する箇所に関連していえば、多くの射撃団は戦没者記念碑を建て、毎年の射撃祭に記念式典を行って、ドイツのために戦没した仲間を追悼した。それは反戦争の気持ちからではなく、犠牲となった仲間を賞賛する形となっていた³⁰。唯一、ミュンデン市からは、反軍事的な感情が伝わってくる。「森の管理訓練生さえも（害獣を除去するための）銃を持って街に行けなかった時期に、数人の勇敢な男たちが射撃協会を復活させた」³¹。第1次世界大戦後には軍事的要素を嫌った人々が多くいた。しかし射手たちはそれに共感ができなかったようである。

資料12：「...1926年1月31日に故郷は異国の占領から解放され、これが特別集会で祝われた。2月7日の解放式典で、解放の喜びと満足が粛々と表明された。王座を決める射撃競技が、再び銃を用いて行なわれた。世界戦争で戦没した射撃団員の冥福を祈って、長い準備を経て戦没者記念碑が厳粛に除幕された。この除幕式は協会の儀式という枠を越えて、故郷の最も大きな協会が、この協会に入っていない市民とも固い絆を持っていることを示した。つらい時期の後に黄金の50周年記念日がやって来た、協会にとってめでたい日である。長い年月のなかでは時々わがままな意見と批判的な会員によって、協会の存続が危うくなったこともある。ときには周囲の事情が人間の意志より強かった。それにもかかわらず、故郷の協会は危機をその都度克服しながら生き残り、暗く悪しき日々のはじめには、明るい日差しの日々と、喜ばしい将来のときを経験する。協会の運命は人間の生涯に似ている。人間たちが協会を支えているからである。協会のなかには人間の愛と偽りが現れた。それでも1人1人が協会に所属しているのは、今日のように忙しくストレスの多い時代に欠かせぬ社交的な寛ぎが、ここでえられるからである。だから将来に向けたモットーは団結であり、共同の意識こそが、故郷の伝統の維持を目指す射撃ギルドの存続の柱である。」（1929年の50周年雑誌より）³²

ここには、フランス・ベルギーのルール地方の占領による明確な反外国意識が見られる。戦争批判がないままで、戦没者の追悼が行われた。射撃協会は全自治体をリードする立場であった。現在に至ってもなお、戦没者追悼は射

撃団の一つの大事な活動である。射撃協会にとって重要な“団結” (Einigkeit)³³は、ワイマール民主主義の政党対立に対する批判としても読み取れる。さらにその考えを拡大して解釈すれば、君主・総統の統制への期待の声までもが読み取れる。ヒルター射撃協会の1929年の挨拶の詩には「...14年には、1人1人が我等の皇帝の呼びかけに応じて、軍隊に就いた」³⁴とある。開戦と敗戦の責任者たる皇帝を恨むどころか、いまだに皇帝として認めるような口調である。同じ1929年の協会の歌には、このようにある。「ドイツの兄弟、射撃の兄弟、手を結べ。[中略] ドイツのマナーを守って、不適切な栄光を回避せよ...」³⁵。ちなみに Borggräfe (2010) は、保守派・伝統的・カトリック的の立場に関係なく、総じて射撃団は反政党政治的なドイツ民族の精神的統一を求める思想をもっていたことをつぎとめている³⁶。

5.1. ナチス時代

これに関する1次的資料もない。前に述べたとおり、戦後の2次的資料の書き方や、書くべくして書いていないところにも注目しなければならない。ナチス時代の態度とその反省は、今のドイツ社会の中でも重要な論点であるので、各射撃協会の扱い方を詳しくみる。

資料13：「今年の射撃祭が我が祖国の国民的な蜂起後、最初のものである。街の風景も数年前とは違う。昔の黒・白・赤の我が国旗と、国民的蜂起の象徴である鉤十字の旗が、青・白のツェレ市の旗や、少数の狭義の故郷の黄・白の旗と一緒に、家々の窓でひらひらなびいている。祭りの参加者の間には、数年前の当時の政乱からくる沈鬱な雰囲気はない。今は皆が自由の空気を吸って、皆の顔に祭りの気分が表われている。[中略]そして最後にドイツの歌と、ホルスト・ウェセル歌が歌われた。...」(ツェレ新聞の1933年の射撃祭についての記事より)³⁷

メディア統制がすでに開始されたので、ワイマール時代をことさらに暗く描き、ナチス時代を国民解放のように描いている。しかし実際のところは、共産黨員や社会民主黨員、ユダヤ人の排除が開始されており、独裁体制の重荷がのしかかっていた。民家で祭りのために飾り付けられた旗が、保守派の象徴であった戦前の国旗(黒・白・赤)とナチ党の旗が多く、ナチ党が好まなかった保守的な地方主義の象徴であった1866年に消滅したハノーファー王国の黄・白の旗もあった。

資料14：「...感動的な言葉で彼〔協会総統〕は協会の戦没者と、全ての世界大戦の戦没者、〔ナチ党の〕運動に殉じた人を祝福した。祝福は“良き仲間の歌”と“ドイツの歌”、“ホルスト・ウェッセルの歌”で行われた。」(1939年、60周年に関する新聞記事)³⁸

ちなみに戦後になってもなお、ナチ党と関係がなかったとみずから強調する射撃協会でも、当たり前のようにナチ党の歌などが歌われた。

5.2. 戦後の射撃協会からみたナチス時代

戦後の射撃協会の自己意識は、ある問題を抱えていた。ナチス時代の射撃協会の活躍であり、ナチスの・軍国主義的な思想である。彼らは独裁政権にどのように加担して、どのような思想から独裁体制を支持していたのか。

たとえば前節の資料13のツェレの新聞記事は、何のコメントもなしにそのまま1979年の記念雑誌に載せられたものである。その当時の新聞が独裁政権のプロパガンダの道具であったこと、また1933年に至るまでの種々の弾圧などには一切触れずに、新聞記事のみから得られる明るい印象だけをそのまま反芻することにより、その時代の間違った（少なくとも偏った）印象を与える危険性がある。

そしてまた資料14は、1つの射撃協会の長い歴史紹介のなかの記事である。ゆえに、その当時の歴史的な背景にまで詳しく触れる事が難しいのかもしれないが、自分の伝統を自慢に思っている協会は、設立時期の歴史的な背景の説明にはかなり力をいれている。選択的に、ナチス時代にはみずから触れたくないという心理が浮き彫りになる機械的な記述となっている。しかも何の説明なしに会長・理事長（Präsident/Vorsitzender）が、協会総統（Vereinsführer）となって記載されている。当時の政治体制が協会の機構に導入されたのである³⁹。多くの協会の関連資料に当たってみたが、僅かな協会しか独裁体制下で統一規定を採用した点に触れていない。他方でまた、射撃そのものをやめた協会の例も1つ見つかった⁴⁰。

以下の表1は、戦後の射撃協会資料のなかのナチス時代の扱いを、記事の年代順にまとめてみたものである。「よい評価」の欄には、その時代にあった、いい出来事の記述例を挙げる。「悪い評価」の欄は悪いと思われるできごとや、時代認識である。「評価なし」は雑誌の編集者がとくに評価せずに載せた客観的な体裁の記述である。

表1 戦後の資料の中のナチス時代に関する供述⁴¹

射撃協会の名称	よい評価	悪い評価	評価なし
グレシュ 1951		<ul style="list-style-type: none"> ・いやな時期 ・信心会が解体され、生き残るために射撃協会を偽装して、射撃連合に入らなければいけなかった ・ひどく騙された ・ひどい戦争 	
デュルメン 1951		<ul style="list-style-type: none"> ・市行政・州博物館が協会の宝(杯と首飾り)を奪う ・帝国スポーツ局がオリンピックのために射撃祭を中止した ・ひどい戦争とテロの時期、道徳的なカオス 	
カッセル 1957	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい射撃場 	<ul style="list-style-type: none"> ・ナチ党が軍事教育のために射撃場を利用して、射撃協会の活動を制限する 	
ローテンブルク 1974	<ul style="list-style-type: none"> ・試合でいい結果を見た ・いい親睦試合 	<ul style="list-style-type: none"> ・灯火管制で射撃しにくくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツから軍事教育への転換 ・射撃競技
ツェレ 1979	<ul style="list-style-type: none"> ・33年の新聞記事(資料13) 		<ul style="list-style-type: none"> ・射撃王のリスト
グレーベンドルフ 1981		<ul style="list-style-type: none"> ・戦争中の困難(食料不足) 	<ul style="list-style-type: none"> ・射撃祭の場所
ヒルター 1980	<ul style="list-style-type: none"> ・射撃場を初めて使った 		<ul style="list-style-type: none"> ・役人変更
フリースオイテ 1987			<ul style="list-style-type: none"> ・帝国総督・ナチ党大区区長出席 ・帝国労働労働奉仕団の音楽隊 ・射撃祭と射撃王
ウェステンフェルト 1995	<ul style="list-style-type: none"> ・1938年は例年にならない良い射撃祭だった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほかの協会と統合せざるを得なかった 	
メンツェルナーハイデ 2004	<ul style="list-style-type: none"> ・1939年の射撃祭についての当時の新聞記事のコメントなしの掲載(資料14) 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争を酷い大虐殺と呼ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争によって中止

ドイツの射撃団の評価

射撃協会の名称	よい評価	悪い評価	評価なし
ミュンヘン 2006		<ul style="list-style-type: none"> ・ナチスが射撃団儀式などを嫌った ・軍事教育として無用と思った射的場で軍事教育を邪魔したと思った・王室に尊敬、ナチス嫌いであった ・嫌われた軍事教育導入 ・ナチス戦争責任 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒトラーなどを招待
クサンテン 2006			
ウェルヴェル 2007		<ul style="list-style-type: none"> ・射撃連盟に入るような圧力 ・ナチス運動によって役人交代 	<ul style="list-style-type: none"> ・鉤十字を旗につけた ・記事：政府の方針と統合する
シュタイエルベルク 2009			
ノルトボルヘン 2010			
プライト 2010		<ul style="list-style-type: none"> ・統制（自分の制服とカトリック射撃連合禁止） 	<ul style="list-style-type: none"> ・軍事教育 ・細筒銃会と統合 ・40-65年同じ人物会長
シンツィヒ 2010			
フベルラート 2010		<ul style="list-style-type: none"> ・強制解体 	
メルツェニヒ 2010		<ul style="list-style-type: none"> ・強制解体 	
ケルペン 2010		<ul style="list-style-type: none"> ・信心会連合は33年以前にはナチスに警戒したが、その後は日和見的に従った。しかし統制に反対したため禁圧された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協会指導者 ・射撃協会が教会との縁を切って、ドイツ射撃面号に入会して継続した
ランダウ 2010			<ul style="list-style-type: none"> ・射撃王
コルネリミュンスター 2010	<ul style="list-style-type: none"> ・軍事教育のため特に推奨された 		
フリーリングスドルフ 2010	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい射撃場 ・1933年の射撃祭は大成功 	<ul style="list-style-type: none"> ・射撃スポーツ連合に入会せざるを得なかった ・協会が解体と再設立された ・名称が変更された ・会員が一割ぐらいまで減った 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ射撃連合に統合された
ヒルデン 2010		<ul style="list-style-type: none"> ・独裁体制の妨げにもかかわらず町ごとの独自性を保てた 	
シュレスウィク 2010			<ul style="list-style-type: none"> ・射撃王

見られるように、さすがに戦争直後は、ナチス時代に対するある程度の否定的な意見が載っている。独裁体制や大虐殺、戦争責任には触れていないが、結論としては、道徳的な問題の存在を認めていたようである。

しかし50年代終わりごろから、ナチス時代の記事のなかでも、射撃協会にとって「よい」ところを載せるようになってきた。否定的な意見があったとしても、射撃協会の活動の「迷惑」だという程度に留まっている。その時代の問題点を一切無視して、まるで平常の営みのように記述している例もある。その時代に市民が平穏に暮らすことができたかのような、まちがった印象を与える可能性が高い。そしてまたその時代については何も触れないような歴史の書き方もある。

21世紀に入るところから、記述の方向が微妙に変わっている。ナチス体制からの圧力がかかったような書き方となり、体制に反対していた射撃団が、被害を受けたように書いている。

6. 戦後の射撃協会

ナチス時代を体験した射手たちは、特段の自己責任意識を持たないまま、1950年から協会を再興した。戦争の間に射撃祭やその他の射撃活動が行えなかったことを悔やんでいる。場合によっては、占領軍による射撃協会の解体令を最も嫌がっている。ローテンブルクでは「“非責任”〔ナチ党に加担していない〕の仲間〔3人の氏名省略〕が我等を清廉潔白の翼の下に保護してくれて、お世話になった」⁴²と、ナチ党的要素の排除を皮肉っている発言まである。

6.1. 地方の首長の意見

戦後の行政組織は射撃団をどのようにみていたか。多くの記念雑誌には郡や市のトップの挨拶が載っている。その点からも射撃団が有力な市民団体であることが読み取れる。挨拶文には、言うまでもなく批判は表れない。かりに行政と射撃団の間に問題があったとしても、記念雑誌にそれが表れるはずがない。しかし挨拶文からは郡長や市長の射撃団に対する期待、あるいはその位置づけが読み取れる。

時代と政治的な立場によって、意見が少しことなるが、ほとんど同じ点が

強調されている。その1が自治体の社交の中心となること、その2が伝統を保持すること、その3は人格形成である。

資料15：「1551年創立のデュルメン市の市民射撃協会が今、珍しい400年設立記念祭を行っています。大変な時期であるのに、協会がこの尊い伝統に当然の誇りを持って祝祭を営んでいることが理解できます。デュルメン市の全市民がこの祭りに関心を寄せています。この祭りは昔の射手の習慣を受継ごうとしています。ウェストファーレン地方の古い習慣の名声を高めるのは、私たちの射撃団の最も喜ばしく重要な役目です。...」（1951年、デュルメン市長の挨拶文より）⁴³

爆弾投下によって瓦礫となったデュルメン市は、敗戦後に市の復興に取り組んでいた。少しでも郷土愛をひき起こすために、デュルメン市長は射撃祭の伝統を強調し、市民祭の要として射撃協会に期待を寄せていたのである。

資料16：「市民射撃協会は、先祖から受継いだ共同感・市民感の維持や、市と田舎の運命共同体の維持の中心である、仲間意識と郷土愛を醸成する責任と尊い役目を、活動の中心とみなすように...」（1951年、デュルメン郡長の挨拶文より）⁴⁴

デュルメン郡長は郡全体のために、この地方の社会や経済の中心であるデュルメン市の復興を望んでいる。彼の視点からは、射撃団の伝統はさほど重要でなく、郡と市の住民の交流と絆のほうが重要であった。

資料17：「スポーツ的・社交的な競争と協力を通して、精神上・性格上の道徳と価値観を発展し、維持すること。それが今の時代にもなお、市民と国民の共同体の豊かな生活には必要である。」（1974年、バイエルン州首相の挨拶文より）⁴⁷

バイエルン州首相は、射撃団の伝統に触れても、それを強調しようとはしなかった。むしろより明確に人間

表2 地方の首長の意見

	社交	伝統	人格形成
デュルメン市長1951	○	◎	
デュルメン郡長1951	◎		
バイエルン州首相1974			◎
ミッテルフランケン知事1974	○	○	○
ツェレ市長 1979		○	
ヒルテル町長1980	◎	◎	
ゲーワズドルフ町長1982	○	◎	
フリースオイテ市長1987	○	◎	
ミュンデン郡長1998			◎
NRW 州首相2009 ⁴⁵		◎	
ベルクハイム市長2009 ⁴⁶	◎		
シュレスウィク市代表2010		◎	◎
シュレスウィク郡代表2010	◎	○	

形成上の意義を挙げている。スポーツと社交、そして競争と協力など、バランスの取れた挨拶である。資料15、16の挨拶が回顧的で停滞的であるのにくらべ、保守的な政党出身の州首相が、動的な「競争」を強調している。経済成長のためにがんばりながら、道徳と価値観も重視しようというのである。

資料18：「...今の慌しい時代には多くの人々にとって、日常のストレスの緩和のためのスポーツ活動が必要と感じられてきました。特にスポーツ射撃が人気です。今、ドイツでは150万人の射手が活動しており、彼らは1万4千の協会に所属しています。厳しい射撃規則は全体的な心身を求めています。ですから、射手は円満で正直な人柄で、しっかりと落ちついて考慮することのできる、社会でも実を示す人々です。彼らは目的に集中することに慣れており、重要なこととそれを達成する仕方とをわきまえています。...」（1998年、ミュンデン郡長の挨拶文より）⁴⁸

資料17の70年代の州首相の「競争」への呼びかけに対して、世紀の転換点を目前にした郡長のほうは、経済成長をすでに成し遂げた市民の疲れを察知している。そういう時代背景の相違はあるが、州首相よりもやさしい言葉で、州首相と同じく人間形成上の意義を強調している。

資料19：「誰も疑わぬ数百年の話と儀式、規則が射撃祭の流れをきめています。全てが印象的です。射撃の兄弟たちが大きな行列となって町を練り歩き、注目を浴びたら、感動しない人はありません。射撃団を古い反動主義者の集まりだと批判する人々はその精神を理解していないのです。射撃協会は近代の発明ではありません。しかし射撃協会は現在にも通用する、益々注目すべき価値を伝えています。...黒い的に当てるための鋭い視力と安定した手先と伶俐な頭脳が、射撃団員に重んじられる特徴です。それに加えて仲間意識と連帯感、郷土愛が特に射撃ギルドにはあるのです。」（2010年、シュレスウィク市代表の挨拶より）⁴⁹

資料19は、つい最近の資料であるが、伝統、共同感、人間形成の論点を挨拶に取り入れている。否定的な意見にも対応しながら、話者自身が感じ入ったような感動の強調が新しい要素である。時代と地方が異なる例を選んで、表2にまとめた。◎が各論点の強調、○が単なる言及を示している。

6.2. 射撃協会関係者の意見

射撃団側は、地方首長の期待どおりに自分の存在意義を思い描いているの

であろうか。そこではまだ戦前の愛国心を主題としているのであろうか、あるいは新しい自己認識を持っているのであろうか。この点を中心にして調査した。時代、場所、個人で差があるので、ある程度代表的な意見や、注目すべき意見を選んで紹介する。

資料20：「...防衛関係から友情関係になった。それを貫くのは我等の尊い義務である。市民射手たちよ。先祖の尊い理想を意識し、それを守って、その原則を考えなさい。この前の数年間にひどい戦争とテロが、人間の間に道徳的な混乱をひき起こした。気高い精神の人間を核にして、正しい道に戻さなければなりません。これは祖先の伝統に基づいた、現代の市民射手の役目です。...古の尊い伝統と責任にしたがい、住民間の統一を計り、敵意を鎮め、友情を結んで強固にすること。共同の仕事のもとで忠実に正直に協力しあい、愛によって、恨みとねたみを取り除くこと。全ての市民射撃人の幸せと、深く愛された我が故郷デュルメン市のために、その役目を忘れないでください。」(1951年、デュルメン射撃教会長の挨拶文より)⁵⁰

資料21：「1950年！無条件降伏の後の、我が国民の深刻なる道徳・信心・精神上の屈辱、退廃・物質主義。物質的な生き残りのための戦いのなかで、我が国民が、外国からは最も文化のない国民だと見られている。」⁵¹ いずれも1951年の戦後最初の射撃祭のパンフレットである。文面には戦争と独裁政権、あるいはそれがひき起こした戦争、敗戦後の混乱と貧困に対する恐怖が見える。しかしナチス思想に類似するエリート意識や、社会的道徳の解体を阻止しなければならぬという責務感が、文面にはまだ強い。会を代表する意見として、社会を守る使命の伝統を強調しているのである。彼らから考えた古き善き時代に戻りたいという気持ちがあって、伝統を守るように強く求めている。それにくわえて、独裁政権や戦争の自己責任に対する反省がみられない。それを証明するように、同じ人物がナチス時代と戦後をつうじて総統・会長を務めた事例が認められる⁵²。

経済成長が軌道に乗って、社会が安定してからは、射撃団員の危機感は薄れて、伝統を継続することで満足したと想像ができる。しかし後の世代は、周りの人間たちから好戦者、ファシストなどと批判されていた。世代交代を済ませて、率直に歴史問題を研究し反省するという可能性もある。しかし批

判を無視して、前世代と団結する反応のほうが多い。しかし伝統だけでは存在意義が保てない。現代の若者たちは、かえって伝統的な儀式などに違和感を持った。だからそれ以降、射撃協会の存在意義をめぐる言説は、特に2つの要素に繋がっていく。その1つは社会的な活動である。仲間の親睦を強調して、地区全体のための活動を掲げている。2つ目はスポーツとしての射撃である。レジャー社会でのスポーツの重要性が増したことが背景にある。

資料21：「射撃団はドイツの都市に生まれた。文化活動の歴史的発展と射撃団の発展がその証拠である。都市での多彩に分化した生活、連結の繋がり、今よりも発達していた共同感という要素が、市内に射撃団を発生させたのである。射撃団の活動のなかには民族の生活・歴史・人生の不安定さが窺える。このテーマを論じるときには、一つの点が明確である。すなわち、狩人の生活と射撃活動は昔からドイツ人の気質なのである。」「ただ昔の射撃団の権威と楽しい祭りの思い出が残っている。ドイツの民衆は異国の占領軍を追い出しただけでなく、賦役と農奴制を廃止して、徐々に失った権利を取り戻した。その時に事情が変わった。特にフリードリヒ・ウィルヘルム4世の統治下では、ドイツのあらゆるところに射撃協会が再興された。スイスの伝統ある射撃祭を真似て、ドイツで射撃連合を結成した。目的はドイツ国民の軍事強化、ドイツ射手の兄弟の契りを結ぶ共同感の高揚、そして射撃の技の完成であった。」(2007年、ウェルファー射撃協会の歴史を紹介するホームページより)⁵³
この資料21では、さりげなくドイツ人の気質を論じている。そのほかにドイツ人の解放精神を述べているが、それはまた問題含みのナチスイデオロギーにも使われたパターンである。

資料22：「...オスナブリュック射撃地区長として、我等共通のドイツの伝統とドイツの慣習、そしてスポーツ射撃のフェアプレイの精神の維持に、お礼を申し上げます。325年前の協会設立以来、貴方がたと御先祖代々がこの考えを過去から伝えてきて、現在にまで生かして、そして我等が現在の社会の提供できる1番の宝である我が子供と青年たちに、その考えを将来にわたって伝えるのです。揺るぎないドイツ射撃活動の保持の努力のために、伝統・習慣の維持やフェアな射撃競争は、貴方たちヒルター射撃協会の真の関心事です。愛する祖国ドイツへの貢献の一部であると思い、これはドイツ射撃活動に係わる我等もその関心事を持つ

ています。...」(1980年のヒルター射撃祭での、オスナブリュック射撃地区長の挨拶より)⁵⁴

1980年のこの挨拶文にも、古い愛国主義的な言い回しが多く使われている。そして次の資料23からは、同じ祭りの別の挨拶でゲルマンの伝統が強調されたことが確認できる。

資料23：「...オスナブリュック地域、特に旧イーブルク郡は、射撃活動の1つの本拠地です。30年戦争前後に射手が発展する住居地の守衛と整備員でした。ゲルマン人の防衛感覚に沿って、自由民として武器の使い方の練習する義務がありました。時代の流れにより、故郷を守るという射撃人の役目は、国家が引き受けました。それゆえ、今の射撃協会には、長い伝統を維持する役目があり、その意味で隣人関係を維持し、住む地域で社会生活と郷土史・郷土愛を保護することです。伝統とは、現在と将来の少年たちを支援する責任という意味でもあります。...」(1980年のヒルター射撃祭での、イーブルク射撃郡区長の挨拶より)⁵⁵

ドイツの先祖と言われているゲルマン人の勇気と自由精神を引用することは、19世紀から盛んに行われてきた。しかしゲルマン精神そのものについての原資料はほとんどなく、射撃祭とゲルマン人を結びつける史料的な裏づけもないのである。

資料24：「ドイツ射撃団の最盛期は15－16世紀であった。その後の世紀に射撃団の本来の意味が低下して、部分的にはなくなった。その理由は18－19世紀における国家・防衛制度の変化によって、町と村での射撃団の防衛と整備の役目の必要性がなくなったことにある。それゆえ、多くの町村では19世紀に射撃団が休止したのだが、これは驚くべきことではない。19世紀の後半から20世紀頭にかけては、多くの人々が真のドイツの伝統・習慣・仕来りを保持・維持するために、協会・連合を組織した。この時に伝統あるドイツの射撃活動も新しい形で復活した。町々村々のあらゆるところに男たちが集結して、古のドイツの文化・価値観を意識しながら、今の射撃協会を設立した。兄弟のように結ばれて、射手の教導挨拶「ホリド」が響き渡る。兄弟のように結ばれて、彼ら先祖の古いドイツの射撃習慣を保持・維持している。本来の意味が変わっていても、真の忠実なる射手の心は変わっていない。...」(1980年、ヒルター射撃団の記念誌の歴史部分より)⁵⁶

資料21のウェルファー射撃団のホームページや、資料22、23のヒルター射撃団の祭での代表挨拶とホームページ本文には、ドイツ人のあり方やドイツの伝統が強調されていた。地方首長の挨拶文にはみられない、民族・国民主義の言辞である。そして射撃祭を古いゲルマン人の伝統と結びつけたがっている言説もある⁵⁷。

資料25：「古い伝統に基づいて、本当の仲間の絆で、ローテンブルクの射手たちが新設した最新式の射撃場で、私たちの貴重な射撃スポーツの和やかな競争において、楽しく過ごす時間を、参加者全員に提供することに努めます。...私たちの第55回の中部フランケン連合射撃会が、生粋のフランケンの射手の集会になるようにと祈念します。昔からの友達が会うことで、新しい友愛の絆が結ばれます。」(1974年、ローテンブルク行政区の射撃団長の挨拶文より)⁵⁸

資料26：「ローテンブルク射撃団の指導的なメンバーが準備した射撃競争や、多彩な催しが、射撃選手のためだけではなく、競争にはもう参加ができない射手仲間のためにも、昔の仲間の中での楽しい寛ぎの時間を提供します。射撃団は昔から、市民たちの本当の役割であるだけではなく、自治体の社会生活の中心でもあります。」(1974年、ローテンブルク地区の射撃団長の挨拶文より)⁵⁹

資料27：「変化の多かったこの数十年間に、射撃活動は良いときと悪いときを経験しました。きつい後退(戦争と苦境)はあったにしても、ドイツの射撃習慣と射撃スポーツへの熱意を打ち破ることはできませんでした。この数十年間に射撃活動を担い貢献してきた方々のことを、感謝と誇りの気持ちをもって思い出しています。我等は彼らの意図を受継いでいく決心を持っています。すなわち、本当の仲間意識、射撃習慣への忠実さ、連帯感、そしてスポーツへの野心、射撃習慣に役立つこと。私たちの尊い役目は、いつかこの射撃習慣を納得して受継ぐことになる少年たちに注目を注ぐことであります。」(1998年、ニダーサクセン州のスポーツ射撃連合会長の挨拶文より)⁶⁰

資料25-27は、射撃団の共同感や仲間意識を強調している。周囲に否定されて、集団はより団結し、集団外の活動を減らして、仲間の絆だけを守りたい

というような、沈滞状態に陥っている。社会的な役割にも触れてはいるが、自分と仲間の趣味である射撃のほうがより強調されている。

資料28：「数十年の間に習慣保持、伝統保持、スポーツ射撃、青少年活動の4つの分野が発展しました。苦境の時期にもこの4つの基本の柱が協会に残っていました。昔、協会設立の遙か前、射撃習慣は市とその住民の防衛のためのものでした。今では、この4つの柱があって、その中でも特に青少年活動が最も重要です。…」(1998年、ミュンデン郡地区長の挨拶より)⁶¹

資料29：「…振りかえって見れば、〔射撃〕協会には様々な時代ごとの流行りと役目がありました。今日では競技と伝習・共同感の維持が重要ですが、昔は村の防衛が第一の役目でした。ただし今日の射手たちのほうが上手です。郡のスポーツ連合に加入して会員も増加しました。かつて嘲られた「故郷」と「連帯感」、「協会所属」が今までより高い評価をえて、今日の目まぐるしく変貌する時代に、理解されるようになりました。…」(1980年、ヒルター射撃団の会長挨拶文より)⁶²

資料30：「今の協会の目的である習慣伝承とスポーツ射撃のほかに、昔の射撃団にはほかの役目もあった。政府はあらゆるところで警察や消防団、軍隊で安全を打ち立てることができず、安全を確保することができなかったときに、射手が町の保安を引き受けた。戦争のときには市民兵として町を守り、平和の時期にも町の安寧を見守った、例えば消防団として。現在に言い換えれば、方法が変わっても協会の目指すところは変わっていない。個人主義が共同感を追い出している社会では、協会の目的は町の住民社会を纏めることである。」(メンツェルナーハイデ射撃団の歴史を紹介するホームページより)⁶³

資料28に強調された「青少年活動」が、射撃団の大きな悩みを示している。若者が協会に入らなくなり、子供射撃王、青年射撃王を通して育てられた若者でさえもが、年配会員の保守主義・伝統重視から逃げていく。そのためにますますスポーツ感覚を取り入れないといけなくなる。若者に人気の射撃の種類(移動する射的、大きな銃)を使うように、射撃場を改造する。ある射撃団に活発的な青少年部があれば、記念雑誌がそれを自慢げに掲載する。資料

29と30の「伝習」や「伝承」が問題の中心を示している。射撃が好きで入会した若者は、協会の儀式と慣習にあまり興味を示さない。保守的な視点から、現代の社会の変化を残念がっている。彼らにとっては個人主義が社会を壊しているのである。変化する時代に射撃団は耐えなければならない。

資料31:「射撃信心会は、毎年1月20日に守護神の行事を開催して、市民参加の春祭りを催している。聖体祭の行列に参加している。射撃祭の際の老人の午後、共通のサンクト・ニコラウス会（アドベント）とクリスマスの老会員宅への訪問が定着した。〔中略〕残念ながら射撃の信心会は今や様々な偏見と戦わなければならない。信心会の社会福祉的なキリスト教的な活動を忘れさせる出来事が時々ある。2009年の525年存続記念の年には、会員が積極的に将来を思い描いている。この活動が続いていくことを、525年の歴史が私たちに教えているからである。今の時代でも信心会の価値である“信仰・礼節・故郷”が重要である。」(2010年、ヒルデン市の聖セバスチアン射撃信心会のホームページより)⁶⁴

周囲の批判をかわすために、社会のための貢献と宗教的な活動を強調するカトリック系の射撃団がある。「信仰・礼節・故郷」はカトリック地方の射撃団の共通のモットーであるが、教会専属感は薄れている。世俗化する現代のドイツでは「信仰」という柱も揺らいでいる。カトリック教会にとって射撃信心会は、信者減少時代における重要なパートナーであり、射撃信心会にとってもカトリック教会は、自己の存在意義のための重要な支えである。しかし「礼節」でまとめた射撃団の習慣は、若者にあまり受け入れられていないし、移動と移住がしやすくなった現代においては「故郷」の意義も危うくなっている。

射撃協会はそろって、自分の古い年齢を証明している。長い伝統が“弱い”人間の支えとなって、古いものは残す価値があるのだと考えられている。長く存在したという継続性の点で、特に頑張らなければならないのである。だから各射撃協会は、自治体の資料の中に射撃協会についての古い記述を必死で探している。例えばヒルター射撃協会の正式名称には「1655年から」という文字が含まれている。1655年は史料中で初めて母体や射撃祭が言及された年であり、射撃協会自体は1904年に設立された。このよう射撃協会は長い歴史と伝統を作って、その権威を身にまとうことで存続を図っている。

資料32:「設立207回の祭りが郷土愛、数百年にわたって先祖の遺産と、

射撃習慣を守ったウェステンフェルトの射手の忠実さの証明になりますように...〔中略〕1788年に設立されたと射撃協会という。王の首飾りに付いている銀の鷲に、この数字が書かれていて、1888年のワッテンシャイト新聞の呼びかけが、この想定を裏づけている。その呼びかけは以下のとおりである。《ウェステンフェルトの独身男性的射撃 我が独身男性的射撃の100年記念を、できれば華やかに行いたいと思います。そのために全ての老射手と青年射手を4月2日、日曜日、午後5時にTh.ツィーママン氏のレストランでの会議に招待します。 独身男性理事会》(1995年、ウェステンフェルト射撃協会会長挨拶より)⁶⁵

この射撃協会は史料によって1788年の創立を証明したいのであろう。むしろその逆に、このとき射撃祭は行われていたが、射撃協会は存在しなかったのだとも読み取れる。協会の総会などがなく、伝達手段を新聞に頼ったとも考えられる。田舎の行事の担い手であった年齢別集団である独身男性団が、この射撃祭を開催しなかった⁶⁶。ともかく創立年代を立証する史料はなにもない。ここに伝統の創造の1例がみられる。こうして、長い伝統に誇りを持ち、古いものには価値と存在意義があるのだと考えられているのである。

7. まとめ

関連資料のごく一部しか紹介することができなかった。しかしこの種の資料の見方を示すことはできたと思う。冒頭に立てた転機の仮説と1つ1つのテーマについては、より多くの資料を調査して、さらに詳細に検討しなければならない。とはいえ以上の限られた資料からでも、以下の諸要点については確認することができたと思う。

近世末期に射撃団が衰退した。啓蒙主義の立場から射撃祭への批判が多くなったが、射撃団は古い権利を保持しようと奮闘した。19世紀前半に民衆は民主主義とドイツ統一を求めた。解放戦争への貢献とロマン主義的な考えから射撃団が増えて、領邦国境を越えたドイツ全土に渡るドイツ射撃連盟が設立されて、1862年の第1回ドイツ射撃祭の際にも統一と民主化が求められた。19世紀後半には愛国心を促進することが射撃団の1つの目的であった。ドイツ統一を成し遂げた君主に従っても、民衆の統一と王権のための業績を強調した。20世紀に入ると都市では射撃団の中心的な立場が揺らいできた。様々

なスポーツや文化の協会ができて、市民が社会的立場や思想的立場によって所属する協会を選んだ。ワイマール時代の射撃団には、積極的に民主主義を応援する姿勢は見られず、むしろ非民主主義的な考えがあった。そのため、「民衆の自由」を掲げた射撃団が、ナチスの独裁体制に、それほどの抵抗もなく組み込まれた。独裁国家が図った統一化に対して、これらの射撃団は自分の伝統と利益を守ろうと努めた。唯一カトリック系の射撃団は教会とのつながりを保つために政府当局と対立し、こうしてナチスに屈しなかった協会は禁圧された。

伝統的価値観をもった射撃団は、戦後の混乱に立ち向かう姿勢をみせた。社交の要と地方の伝統保持者として、地方の首長・行政からの支持をえた。経済成長のなかで、射撃団の希望は叶わなかった。社会の変化を阻止できなかっただけでなく、変化は射撃団にも及んだのである。仲間意識が揺らいで、自分の趣味を中心に動く人々が多くなり、社会または協会のために奉仕する人々が少なくなった。それに対して射撃団は自分の伝統に誇りを持って仲間を固めた。そのために古い伝統を作り上げて、集団の自負を高めているのである。ナチス時代に積極的に活躍した仲間とも仲違いしないようにと批判を行わずに、独裁体制は悪くても時代としてはそれほど悪くないという見方も広まった。射撃団が生き残るために、徐々に射撃スポーツの様々な武器を射撃場に導入して、女性にも門を開かなければならなかった。そのプロセスのなかでナチス時代に対する反省は行なわれなかった。世代交代によって最近では、射撃団のナチス時代にも触れるようになってきたが、依然としてかたよった見解で、射撃団を歴史の被害者として描いたりしている。射撃団は今でも保守的な考えを持っている。しかし世代交代とともに徐々に世論にあわせて、より開かれたものになっていく可能性もないわけではない。

註

- 1 戦後に戦争責任に対する反省から軍事的要素が嫌ってきた（再軍備反対、兵役拒否）。数年前から乱射事件が起こって、それに対するメディアや被害者家族を先頭に世論が銃の所持をより厳しく制限するように求めた。しかし射撃協会連盟が地元のネットワークを利用して、陳情活動でそれをほとんど阻止できた。“Bewaffnete Republik Deutschland” Spiegel 13/2009
- 2 この論文で「射撃団」という言葉は、射撃信心会や射撃ギルド、射撃協会、または組

織されない射撃祭のために集まった射撃人を指す。そのうち「信心会」は近世までの呼称であり、カトリック地方では1920年代から「信心会」という名称が再び多く使われている。「ギルド」の名称は伝統的にプロテスタント地方で使われており、「協会」は近代的な協会法人を指す。

- 3 プロテスタント国家であるプロイセンはローマ教皇中心のカトリック教会の活動に疑いを持った。
- 4 Polowski, Monika p.14-15
- 5 以前筆者はケルンのカーニバル会に関して同じ見解を得た。Holst, Sven 「ドイツにおける“Verein”(協会・クラブ)発展と意義について」愛知県立大学外国語学部紀要第35号2003年
- 6 ライン地方の多くの協会を束ねる「歴史的射撃信心会連盟」(Bund der historischen deutschen Schützenbruderschaften)のメンバー・リストから三つの地区を確認したところ、射撃団の1/4しかホームページを持っていなかった。
- 7 ホームページは協会外へのショーウィンドーのような存在であるが、多くの場合に協会内のコミュニケーションツールとして使われている。
- 8 Trox/Behrend 「会の記念行事の雑誌の調査はこのような質問(ナチス時代の立場や女性の役割)の答えのためにほとんど役にたない」p.2 この見解は、大量に存在する記念雑誌の資料としての価値を否定している。しかし、本文に述べた制約はあるものの、この資料が作られた時点の射撃団側の意識を調査するためには有益な研究材料である。
- 9 „Beiträge zur Beschreibung von Schlesien“ 1789, p.219-220
- 10 „Hannoverisches Magazin“ 37号 1776, p.531-533
- 11 „Beschreibung der Stadt Elbing und ihres Gebietes“ 1818, p.238-239
- 12 「ギルドの気まぐれの考えは、市の会計課を無駄な出費に導く」 „Beschreibung der Stadt Elbing und ihres Gebietes“ p.238
- 13 フリードリヒ・ウィルヘルム2世の節約主義と、ベルリンのギルドがギルドの再編に反対したことに対する復讐であろう。Krünitz, D. Johann Georg: „Ökonomisch-technologische Encyclopädie ...“, Band 227, 1855, p.176-214
- 14 1793年にフランス革命軍が一時期、マインツ市までのライン川の西側を占領したため、もともと四十人だった射撃団が140人に増大した。短期的であるが、射撃団が再確認された。Hendel, Johann Christian: „Archiv für deutsche Schützengesellschaften“ Halle 1803, p.84-86
- 15 Ein Mitglied der Berlinischen Schützengilde „Auch über die Schützengilden“ Berlinische Monatsschrift Bd. 6, 1785, p.256-258
- 16 <http://www.schuetzengesellschaft-hallenberg.de/> (2010.7.24.)
- 17 Krünitz, D. Johann Georg: „Ökonomisch-technologische Encyclopädie ...“, Band 227, 1855, p.176-214
- 18 „Statuten der Schützengilde zu Brückenau“ 1848
- 19 Berends, Julius: „Vorträge über Vergnügungen und öffentliche Feste“ gehalten im Berliner Handwerker-Verein, p.113-121, 1846

- 20 „Schützengilden und Landsturm“ Berliner Revue 1856
- 21 革命が最終的に失敗に終わったので、自分の射撃団の活動を書き換えた可能性が高い。ポツダム射撃団史についての論文において革命が批判されているが、革命の際、射撃団の司令官が交代されたので、革命に対する姿勢について射撃団内で激しく議論されたことが想像できる。Wagener „Die Schützengilde zu Potsdam“1865ほかの資料でポツダム射撃団の民衆側での出動が見られる。Lasker, Julius: „Des deutschen Volkes Erhebung im Jahre 1848“ 1848, p.565
- 22 „Schützengilden und Landsturm“ Berliner Revue 1856
- 23 „Das erste deutsche Schützenfest in Frankfurt“ 1862, p.14 スイスの民衆が君主に勝利したことについて好意的に触れている。p.24演説の「1848年に民主が自分の意識を表明した」のところで絶えない歓声が起こる。p.40「自由の意味は平等と人権である。」p.40-41、1848年にアメリカに亡命したドイツ人に万歳p.43
- 24 射撃祭の歴史的を説く同年の Kelchner, Ernst: „Drei Frankfurter Schützenfeste“ 1862 の中では、騎士が庶民に対する泥棒と見なされており、身分社会には批判的である。
- 25 „Das erste deutsche Schützenfest in Frankfurt“ 1862, p.42
- 26 „Meyer Enzyklopädie“ 1905, p.89
- 27 „750 Jahre Steyerberg“ 2009, p.39, www.750-jahre-steyerberg.de
- 28 2004年に協会史を載せた。<http://www.menzelen-west.de/geschichte.html> (2010.7.25.)
- 29 Felten: „Fest-Schrift zur 400 Jahrfeier des Siegburger Schützenvereins“ 1914, p.52
- 30 例えば Menzeler Heide 射撃協会の歴史、1929年の記述：「25名の射撃兄弟が名誉ヶ原に残った。」名誉ヶ原は戦場を美化する表現である。<http://www.menzelen-west.de/geschichte.html> (2010.7.25.)
- 31 „Mündener Schützenverein von 1823 und die Zeit davor“, p.120
- 32 (2004年に協会史を載せた) <http://www.menzelen-west.de/geschichte.html> (2010.7.25.)
- 33 本来、領主や盗賊、通過する軍隊に対する団結であった。
- 34 „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ p.62
- 35 „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ p.63
- 36 Borggräfe, p.18-23
- 37 „400 Jahre Altstädter Schützengilde v. 1579“ p.47
- 38 Menzelerheide、2004年に協会史を載せた。<http://www.menzelen-west.de/geschichte.html> (2010.7.25.)
- 39 ただし Borggräfe, p. 36によれば、射撃協会組織の名称や役職は独裁体制的になったとしても、実際は以前と変わらずに話し合いで運営がされていたとのことである。
- 40 射撃信心会メルツェニヒ：「以降、統制化を回避する試みは失敗した。協会との強い絆を保ちたかったので、信心会は1937年に強制解散された。12年間の休止の後、聖セバスチアン射撃信心会が1949年に復活した。www.schuetzen-merzenich.de そしてまた「伝統的射撃信心会連合」のホームページでは以下のように説明している「多くの射撃信心会が独裁政権の圧力に屈服して、信心連盟から離脱した。しかし過半数が射撃を止めて、協会活動に専念した。」www.bund-bruderschaften.de 屈服した会と射撃

をやめた会の割合は未解明である。

- 41 St. Sebastian-Schützenbruderschaft Glesch „Festschrift zum hundertjährigen Jubelfest“ 1951, „Jubiläumsfestschrift 400 Jahre Bürgerschützenverein“, „Festschrift des Heimat- und Schützenfestes“, „600 Jahre kgl. priv. Schützengilde Rothenburg“, „400 Jahre Altstädter Schützengilde v. 1579“, „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“, „Das Friesoyther Schützenfest“, www.menzelen-west.de, „600 Jahre königlich privilegierte Hauptschützengesellschaft München“, schuetzengesellschaft-xanten.de, www.schuetzenverein-welver.de/geschichte.html, hubertusschuetzen-sinzig.de, www.hubbelratherschuetzen.de, www.schuetzen-merzenich.de, „750 Jahre Steyerberg“ 2009, p.39, www.750-jahre-steyerberg.de, www.schuetzen-plaidt.de, <http://www.schuetzen-nordborchen.de>, www.stseb-kerpen.de, www.schuetzengilde-landau.de, [/www.kbsgonline.de](http://www.kbsgonline.de), www.schuetzen-frielingsdorf.de/start.html, www.st-seb-schuetzenbruderschaft-hilden.de, „Altstädter Knudsgilde von 1449“
- 42 „600 Jahre kgl. priv. Schützengilde Rothenburg“, p.35
- 43 „Jubiläumsfestschrift 400 Jahre Bürgerschützenverein“ p.5
- 44 „Jubiläumsfestschrift 400 Jahre Bürgerschützenverein“ p.7
- 45 „Festschrift zum 375 Jahr der Gründung“ 2009年の375周年記念誌 p.7、NRW：ノルトライン・ウェストファーレンの省略
- 46 „Festschrift zum 375 Jahr der Gründung“ p.9
- 47 „600 Jahre kgl. priv. Schützengilde Rothenburg“, p.2
- 48 Czichelski, Martin.: „175 Jahre Mündener Schützenverein von 1823 und die Zeit davor“ 1998 p.XII
- 49 „Altstädter Knudsgilde von 1449“ Schleswig, 2010
- 50 „Jubiläumsfestschrift 400 Jahre Bürgerschützenverein 1551 e.V. Dülmen“ 1951, p.3
- 51 St. Sebastian-Schützenbruderschaft Glesch „Festschrift zum hundertjährigen Jubelfest“ 1951, p.8
- 52 ヒルターで1934年から1960年まで、ローテンブルクでは1934年から1939年まで、そして1951年から1956年まで同じ人物が筆頭に勤めた。1949年と1950年にほかの二人が筆頭を勤めた。
- 53 Welver Horrido 2007, <http://www.schuetzenverein-welver.de/geschichte.html> (2010.8.2)
- 54 Stimming, Burchard: „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ 1980, p.7
- 55 Stimming, Burchard: „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ 1980, p.9
- 56 Stimming, Burchard: „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ 1980, p.45-47

- 57 Stimming, Burchard: „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ 1980, p.9
Bachter, Stefan: „600 Jahre königlich privilegierte Hauptschützengesellschaft München“ 2006, p.26-28
- 58 „600 Jahre kgl. priv. Schützengilde 1374 Rothenburg“ 1974, p.8
- 59 „600 Jahre kgl. priv. Schützengilde 1374 Rothenburg“ 1974, p.9
- 60 „Mündener Schützenverein von 1823 und die Zeit davor“ p.X
- 61 „Mündener Schützenverein von 1823 und die Zeit davor“ p.XIV
- 62 „Festbuch zur 325jährigen Jubelfeier des Schützenvereins Hilter“ 1980, p.3
- 63 Menzelerheide, <http://www.menzelen-west.de/geschichte.html> (2010.7.25.)
- 64 www.st-seb-schuetzenbruderschaft-hilden.de (2010.7.26.)
- 65 Alter Schützenverein Westenfeld 1788 e.V „Festschrift zum 207jährigen Bestehen und des 76. Schützen- und Volksfestes“ 1995
- 66 結局、皇帝フリドリヒ3世の死去によって、中止された。

参考文献

- Borggräfe, Henning: „Schützenvereine im Nationalsozialismus“ Ardey Münster 2010
- Dröge, Kurt: „Schützenfeste im Lippischen“ in: „Festkultur in Lippe“, Waxmann Münster 1994
- Erich, Oswald/Beitl, Richard: „Wörterbuch der deutschen Volkskunde“ Kröner Stuttgart 1974
- Langewiesche, Dieter: „Kulturelle Nationsbildung im Deutschland des 19. Jahrhunderts“ in:
„Nation und Gesellschaft in Deutschland“ Beck München 1996
- Palowski, Monika: „Schützenfest ist Männersache“ Eine qualitative Studie zur Inklusion von Frauen in einen niederrheinischen Schützenverein“ Diplomarbeit Universität Bielefeld Fakultät für Soziologie 2009
- Trox, Eckhard/Behrendt, Jörg: „Schützenwelten. Bewegte Tradition im Sauerland“ Heimatpflege in Westfalen 5.2006